

虹に

村上 豊 (橄欖主要同人)

螢田てふ駅を過ぎりてここに虹みし人の幸われを明るめ 渋谷 静子
一分にみたざる 間^{かん}にあひし虹の光を 永久^{とくは}となしたる一首 同

本誌の作品から

「螢田」は諸賢ご承知の小中英之の第二歌集『翼鏡』の
螢田てふ駅に降り立ち一分の間^{かん}にみたざる虹とあひたり
という一首に触発されたと思ふ。

虹は歳時記では「夏」だが、「螢田」という地名から「螢」→「夏」→「虹」と波紋が広がってゆく。

小中には第一歌集『わがからんどりえ』と没後『過客』という未完歌集もあるという。小中と同年生まれの俳優加山雄三が「若大将健在」と傘寿の祝いがニュースになっている。それはそれとして虹を詠んだ作品は、例えば
太き虹湖上に立つは河太郎に尻ぬかれたる馬の背より 香川 進
虹の下くぐりゆくとは知るはずもなき遥かなる車見てをり 高安 國世
とか探せば沢山あるだろうに、渋谷氏は何故小中詠に拠ったのだろう
出詠は春酣の四月、春の虹からの連想か。

(一連の作に 今日明日と待ちみし春の逝くやうに車窓に菜花のはたけす
ぎゆく もある)

虹はなぜ虫偏であるか熱風の地下鉄(竹橋)駅に立ちみて 松平 盟子
のように文字に拘ったのか、たまたま螢田に来たからか、いやそんな簡単なことではないのでないか。「われを明るめ」と詠ってゐる。

思い屈するものがあり、小中の一首で糸口を見つけたのだと思う。

螢田の一首ばかりでなく、彼は病人だ。

晴天の日も灰色だろう。と誤った先入観で対していたが、渋谷氏に教えられた。

そうなのだ。虹は天の授けた御褒美であるから怒る人はまずみない。茂吉のように

最上川の上空にして残れるはいまだうつくしき虹の断片
と見惚れるだろう。

たまゆらの虹に小中は「あひたり」と詠んだのだ。彼は心の裡に微笑したことだろう。この瞬間は幸せだったに違いない。

高橋睦郎著 『歳時記百話』「虹」に
一虹を神との契約のしるしとするユダヤ教・キリスト教を貫く信仰だろう。
一と。

虹に謝す妻よりほかに女知らず 中村草田男
氷片にふるるがごとくめざめたり 患むこと神にえらばれたるや 小中 英之
彼は選ばれたる者として誇り高く病床で暮らしていたのだ。

花びらはくれなゐうすく咲き満ちてこずゑの重さはかりがたしも
人形遣ひたりしむかしの 黒衣^{くろゑ}なほいかに過ぎしもわれはふさはし
少年の日よりほろほろ秋ありて葡萄峠を恋ひつつ越えず
酔へば眼にゆらぐかずかずかぎりなしあなベレニケの髪もゆらぐよ
彼も酔う時があった。ああ透明なコップに、日本酒の豊潤な琥珀色を讃えて。

鶏ねむる村の東西南北にぽあーんぽあーんと桃の花みゆ
高橋睦郎氏は「わが国の古歌に虹の詠まれることは少なく（略）俳句で虹
が季語になったのは大正以降かとされる。」新しいのだ。